

名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成25年12月1日発行 通巻24号(年2回発行)

発行/名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-4225(受付) FAX 052-789-4222
<http://iccae.agr.nagoya-u.ac.jp/index.html>
e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

第14回オープンフォーラム「世界で活躍できるグローバル農学人材の育成に向けた大学の取組みの方向性—多様なキャリアパスの開拓に向けた現状と課題—」開催

農学国際教育協力研究センター(農国センター)は、2013年10月29、30日、名古屋大学野依記念学術交流館で第14回オープンフォーラムを開催しました。農国センターが昨年度とりまとめた「農林水産研究分野で国際的に活躍できる日本人材の育成に向けた我が国の取組みの方向性」についての提言の中で指摘した大学の課題について議論を深め、多様なキャリアパスの事例を示すことを目的として開催しました。

FAO事務局長補兼アジア太平洋地域代表の小沼廣幸氏は「世界の農業と食料安全保障の将来と若者に期待するもの」と題して、また、農業・食品産業技術総合研究機構理事長の堀江武氏は「いま求められる農学研究者と途上国フィールド研究」と題した基調講演の中で、若者は目標を高く持ち、失敗を恐れずに世界にチャレンジすることが大事である一方、若者をグローバル人材に成長させるのは教員の仕事であり、教員は学生に対して途上国でのフィールド研究で早い段階から農業の地域研究を経験させ、農学的解決のための課題設定と現地経験などを積み重ねることが重要であると強調されました。

国際的に活躍する人材、そのキャリアパスの講演

では、国際熱帯農業センター(CIAT)の石谷学氏、国際半乾燥熱帯作物研究センター(ICRISAT)の倉井知寛氏、国際獣疫事務局(OIE)アジア太平洋地域事務所の石橋朋子氏、国際協力機構国際協力専門員(水産分野)の杉山俊士氏それに株式会社JIN 代表取締役の大野康雄氏がそれぞれのキャリアを築き上げてきた経験から意見を披露されました。研究者としてまず強いパッションをもち、十分なコミュニケーション力を鍛え、generalist in agricultureとなることが必要で、それには先生の指導の下で大学院の時から海外の研究機関等を利用して力をつけていくこと、また大学はそのようにできるコースを設けて、海外進学者のキャリアパスの“見える化”を図ること、大学は狭い一つのドメインでは教育が難しいことを理解した上で学生の人間性の陶冶と深い考え方の訓練を行うことが必要であり、さらに国際的に通用するには、絶えず個人の能力の向上や意識の明確化のために自ら努力することはもちろんであることなど、学生本人と大学、教員のなご一層の努力の必要性が指摘されました。

大学によるグローバル人材育成プログラムでは、文部科学省高等教育局の安藤博氏、鳥取大学農学部安延久美氏、茨城大学農学部長の太田寛行氏それに名古屋大学生命農学研究科の川北一人氏が講演されました。我が国では留学生受け入れから我が国の学生を海外派遣する双方向交流の推進へ政策が転換されたこと、修士の間に日本とインドネシアで教育を受け研究を行って修士論文を2つ執筆するダブルディグリーの先進的な取り組み、タイでの海外学習やカンボジアおよびタイの大学との学生交流での工夫や課題が紹介されました。総合討論では、学生に対する現場経験の機会の提供やフィールド研究の重要性、育成された人材が国際的に活躍できる機会や職務の提供の重要性など大学の取組みの重要性を共有することができました。(浅沼修一)



様々なキャリアをもつ講演者と参加者